

『研究報告』の20年

松村 朋彦

1980年代の半ばごろ、今はもう影もかたちもない文学部旧館の2階に、独文研究室という部屋があった。今とちがってエアコンもコンピューターもなく、真中にテーブルと石油ストーブ、片隅に机とほとんど中味のない書架が置かれているだけの、天井がやけに高くて昼間でも薄暗い、殺風景な空間だった。隣の中文研究室のにぎわいとは対照的に、ふだんはあまり人影もないこの部屋で、何やら熱心に議論している学生たちの姿があった。独文の大学院生たちが、新しい雑誌を創刊する相談をしているのだった。最初はこの部屋と同じく『独文研究』と名づけられるはずだったこの雑誌は、結局『研究報告』という簡素で控え目なタイトルのもとに、1985年8月に第1号が刊行される。

このとき独文の助手だった私は、第2号(1986)に一度論文を載せてもらっただけで、雑誌の運営と編集にそれほど深くかかわることはなかった。だがそれにもかかわらず、1983年から88年まで助手をつとめ、93年から助教として再びここに籍をおくことになった私にとって、この雑誌はその書き手である学生たちとともに、いつもかたわらを並走してくれている存在だった。そんな並走者としての立場から、『研究報告』の20年を振り返ってみることにしたい。

第1号から第19号へといたる『研究報告』の紙面には、この20年間の独文研究室の歩みとともに、ドイツ語学ドイツ文学研究をめぐる状況の変化が鮮やかに映し出されている。最初は、しだいに増加しつつある博士課程の学生のための論文発表の場としてスタートしたこの雑誌だったが、やがて就職状況が一時的に好転したこともあって、第3号(1988)以降は、すでに就職についた者の寄稿が目立つようになる。第2号、第3号、第4号(1990)のあいだにそれぞれ2年ずつの間隔があいているのも、雑誌運営の主力となる博士課程の学生数の減少が原因だったのだろう。この雑誌が、修士論文を活字にするというもう一つの役割をはたすようになるのもまた、この時期以降のことである。

1990年代の半ばに入ると、就職状況は年々厳しさを増すようになる。だがそれはまた、この雑誌がその真価を発揮する時期でもあった。博士課程の学生たちが学位取得をめざすようになるとともに、『研究報告』は博士論文の中間発表の場となってゆく。学術雑誌としての性格が強化され、第9号(1996)からは論文にドイツ語要旨が添えられ、ドイツ語で書かれた論文も掲載されるようになる。

1997年に、独文研究室は文学部新館7階に移転する。廊下の窓から大文字山を正面に望むこの部屋は、狭いながらも各種の参考資料を完備し、学生たちの読書会や研究会がひんばんに開かれる場所となる。『研究報告』もまた、第12号(1999)以降は、この部屋のパソコンを使って版下まで学生たちの手で作成されるようになる。

21世紀に入ると、大学院生の男女比が逆転する。論文のスタイルの点でも、テーマの点でも、『研究報告』に新しい風を吹き込んだのは女子学生たちだった。第18号(2004)からは、人間・環境学研究科の学生たちも執筆者に加わり、文学研究から文化研究へという視野の拡大はいっそう顕著になった。『研究報告』という簡素ながらも間口の広いタイトルは、この雑誌の現状によく合っていると思う。

2006年、独文研究室のホームページが開設され、『研究報告』の総目次が掲載された。やがてこの雑誌自体が電子テキストとして、どこからでも読めるようになる日もそれほど遠くはないことだろう。

だが、こうした変化のなかで、20年間を通じて変わらなかったものがあるとすれば、それは、この雑誌が教員の手を借りず、学生たちだけの手で運営され、編集されているという点に尽きるだろう。他大学では同種の雑誌の多くが、教員によるレフェリー制をとっているのにたいして、『研究報告』の生命線は、執筆者たちのあいだでおこなわれる厳しい読み合わせにある。創刊時以来のこうした精神を受けついで、『研究報告』が若い研究者たちの自由で開かれた研鑽の場であり続けることを願ってやまない。

[京都大学大学院文学研究科助教授]